

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2006 年度～2009 年度
 課題番号：18530549
 研究課題名 (和文) 母親の対人的楽観性の変容が幼児の対人行動の改善に及ぼす効果
 研究課題名 (英文) Women's optimistic attributional style improve the interpersonal behavior of their children
 研究代表者
 沢宮 容子 (SAWAMIYA Yoko)
 立正大学・心理学部臨床心理学科・教授
 研究者番号：60310215

研究成果の概要 (和文)：

本研究の目的は、母親の対人的楽観性の変容が幼児の対人行動の改善に及ぼす効果について検討することであった。幼稚園および保育所の園児とその母親を主たる対象に研究を行った結果、母親の対人的楽観性と幼児の対人行動との間には正の相関があり、母親の対人的楽観性は幼児の対人行動に正の影響を及ぼしていることが明らかになった。さらに、母親の対人的楽観性の変容は幼児の対人行動の改善に一定の効果をもたらすことが示唆された。

研究成果の概要 (英文)：

The objective of this study was to examine the influence of the transformation of a mother's optimistic attributional style on the improvement of the interpersonal behavior of her children. This study was conducted involving preschool children attending nursery/kindergarten and their mothers. The results indicate that there is a positive correlation between a mother's optimistic attributional style and the interpersonal behavior of her children, and that the former has a positive influence on the latter. Furthermore, it was suggested that the transformation of a mother's optimistic attributional style has some influence on the improvement of the interpersonal behavior of her children.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,300,000	0	1,300,000
2007 年度	400,000	120,000	520,000
2008 年度	400,000	120,000	520,000
2009 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総計	2,500,000	360,000	2,860,000

研究分野：臨床心理学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：楽観性・悲観性・帰属様式・ポジティブ心理学

1. 研究開始当初の背景

本研究で取り上げる楽観性という概念については、Abramson, Seligman, & Teasdale (1978) が、無力感の予防策として楽観的な期待の必要性を論じたことに端を発し、その負の側面も含め数々の実証的な研究がなされてきた (Affleck, Allen, McGrade, & McQueeney, 1982; Manly, McMahon, Bradley, & Davidson, 1992; 増田, 1994; 坂野・戸ヶ崎, 1993; Seligman, 1991; 藤南・園田・詫摩, 1993; 戸ヶ崎・坂野, 1993 など)。「心理学は人間のより積極的な側面に注目すべきである」と Seligman が提唱したことで知られる「ポジティブ心理学」においても、楽観性は重要な概念となっている (小玉, 2002 など)。

2. 研究の目的

本研究の目的は、母親の対人的楽観性の変容が幼児の対人行動の改善に及ぼす効果について検討することであった。

3. 研究の方法

(1) 母親の対人的楽観性と子どもの対人行動との関連について明らかにすることを目的とし、幼稚園・保育園3園の園児とその母親117名を対象とし、調査を実施した。調査にあたっては、親の対人的楽観性だけではなく、親の養育態度をも同時に取り上げ、各々が子どもの対人行動とどの程度関連をもつのか、相対的な重要度を検討した。

具体的には、幼稚園の園児の母親を対象に質問紙調査を実施した。また園児の担任教諭を対象に、それぞれの園児について質問紙調査を実施した。さらに、並行して園児を対象とした自然観察を行った。

(2) (1)で行った研究の対象者から、性別、月齢、対人行動の発達程度などはほぼ同様な、母親の対人的楽観性が高い幼児の群と低い幼児の群とを抽出した。各群の幼児の対人行動の発達プロセスを、ビデオ録画および自然観察の分析などによって比較し、母親の対人的楽観性が幼児の対人行動に及ぼす影響について検討を行った。

さらに、対象児の母親に対する個別面接も継続して実施した。

4. 研究成果

子どもの対人行動と母親の対人的楽観性との間には正の相関があり、子どもの対人行動は、母親の養育態度よりも母親の対人的楽観性との関連が高いことが明らかになった。

また、母親の対人的楽観性は幼児の対人行動に正の影響を及ぼしていることが明らかになった。

さらに、母親の対人的楽観性の変容は幼児の対人行動の改善に一定の効果をも及ぼすことが示唆された。

なお、本研究で得られた一連の研究成果については、「平成20年度日本カウンセリング学会記念賞—独創研究内山喜久雄記念賞」を受賞するなど、学会で高い評価を得ることが

できた。

また、幼児の対人行動を改善するうえで、予防的・開発的援助が肝要であることが示唆されたことから、今後は「母親の対人的楽観性の変容が幼児の対人的問題行動の予防に及ぼす効果」について検討を行うことが必要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

①西田恵里子・奥野誠一・沢宮容子 (印刷中). 青年期の友人関係における『自己表明』と『他者表明を望む気持ち』がライフイベントにおよぼす影響 心理臨床学研究, **28**. 査読有り

②海部紀行・沢宮容子・楡木満生・井田政則 (2010). 不合理的信念と自己意識が主張行動に及ぼす影響 産業カウンセリング研究, **12**, 1-10. 査読有り

③浦上涼子・小島弥生・沢宮容子・坂野雄二(2009). 男子青年における瘦身願望についての研究 教育心理学研究, **57**, pp. 263-273. 査読有り

④西田恵里子・奥野誠一・沢宮容子 (2009). 大学生のアサーションがライフイベントの体験に及ぼす影響 カウンセリング研究, **42**, pp. 118-124. 査読有り

⑤ 沢宮容子 (2009). 楽観的帰属様式がネガティブな側面への注目と抑うつ

傾向に及ぼす影響 応用心理学研究, **34**, 180-181. 査読有り

⑥ 沢宮容子 (2009). コーピングの柔軟性と心理的ストレス反応の関連 立正大学大学院心理学研究科研究紀要, **4**, pp. 141-148.

⑦沢宮容子・田上不二夫 (2008). 認知行動療法による悲観的帰属様式の変容 カウンセリング研究, **41**, 346-355. 査読有り

⑧大工原美香・奥野誠一・沢宮容子 (2008). 気晴らし型反応スタイルと対処方略との関連 産業カウンセリング研究, **11**, 32-38. 査読有り

⑨岡部良太・奥野誠一・染木史緒・芳川玲子・沢宮容子 (2008). 衝動性のコントロールに困難を示す小3男児へのソーシャルスキル指導——挙手行動に焦点を当てて—— LD 研究, **17**, 181-190. 査読有り

⑩沢宮容子 (2006). 母親の楽観性と子どもの社会性との関連 学校カウンセリング研究, **8**, 25-33. 査読有り

[学会発表] (計 2 件)

① Yoko SAWAMIYA, Fujio TAGAMI et al. (2008). Impact of optimistic attributional style on attention to negative aspects and depressive tendency *The Proceedings of the 13th Congress of the Asian College of Psychosomatic Medicine*, 153. 査読有り

り (7人、1番目)

- ② Daisuke IKOTA, Seiichi OKUNO, Yoko SAWAMIYA, et al. (2008). The relationship between hope and problem-solving ability *The Proceedings of the 10th International Congress of Behavioral Medicine*, 231. 査読有り (4人、3番目)

[図書] (計2件)

- ① 沢宮容子 (2010). 認知変容の技法 榎木満生 (編) クライエント問題解決のための面接技法 現代のエスプリ, **515**, 48-57.
- ② 沢宮容子 (2008). アサーショントレーニング 内山喜久雄・坂野雄二 (編) 認知行動療法の技法と臨床 日本評論社 pp. 93-99.

[その他]

- ① 沢宮容子 (2009). 楽観性と心の健康 児童心理, 第63巻, 1月号, pp. 11-16.
- ② 沢宮容子 (2008). 楽観的帰属様式の臨床心理学的研究 平成19年度筑波大学大学院人間総合科学研究科博士論文

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

沢宮 容子 (SAWAMIYA Yoko)
立正大学・心理学部臨床心理学科・教授
研究者番号：60310215

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：